

ディケンズ『ドンビー父子』における家父長制と貨幣のメタファー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2015-10-01 キーワード: 作成者: 清水, 勇樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17570

ディケンズ『ドンビー父子』における 家父長制と貨幣のメタファー

Patriarchy and the Metaphor of Currency in Dickens' *Domby and Son*

博士後期課程 英文学専攻 2014年度入学

清水 勇 樹

SHIMIZU Yuki

【論文要旨】

チャールズ・ディケンズによる小説『ドンビー父子』では、資本主義と家父長制との結びつきによって生じる、資本主義的家父長制に支配された世界観が描かれる。そこでは、父親と息子とが、あたかも貨幣が自己増殖していくかのように単性生殖的な相似形で描写される一方、母親と娘は、経済的価値を産めぬ財産として父親から持て余される。本来子供を産めないはずの男性が、貨幣を再生産できる存在として描かれる一方、有性生殖を司るべき女性は、経済的再生産の不可能な存在として疎外されているのである。家父長制は貨幣という強い権力を持ち出すことによって、人間の性を倒錯的な形に変形させることが可能になるのである。ただし、貨幣には可塑的で流動的な性質もあるから、これに根拠を置いた家父長制とは、いきおい不安定なものでもある。貨幣によって築かれた権力は、貨幣そのものの流動性によって自壊することとなるが、このことから浮かび上がるのは、金持ちであることが同時に彼を尊敬すべき紳士に仕立て上げる、という社会通念に対する疑義である。ディケンズはそうした考え方に反対し、社会的成功よりも、家庭に根拠を置く生き方を提示したのではないか。

【キーワード】 家父長制, 貨幣, 再生産, 流動性, リスペクタビリティ

1. はじめに

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) による連載小説『ドンビー父子』(*Domby and Son*, 1846-48) は、資本主義と家族関係との異様な混ざり合いを提示した点において興味深

い作品である。「ドンビー父子商会」を取り仕切る冷徹な商人ドンビー氏は、跡継ぎとなる息子ポールのみを可愛がる一方、先に生まれていた娘のフローレンスを蔑ろにする。だが、ドンビー氏の期待に反して息子ポールは早死にし、商会も破綻してしまうが、ドンビー氏はすべてを失ったと思って初めて、父の愛を求め続けた娘との和解にこぎつける。この物語をめぐっては、タイトルに反し「中流階級における父と娘との家庭関係が追及された」（松村，1991）とする立場や、「本作のテーマは、拝金主義よりむしろ傲慢さと家父長制」（シュリンプトン，2007）だとする立場がある。本作が結局父と娘の物語に収斂していくという松村の立場には私も賛成だが、物語序盤において、ディケンズが父と息子をクローンのように似せて描写している点にも、同様に注目すべきであるだろう。この父息子関係は、シュリンプトンのように拝金主義を超越した家父長制というより、むしろ貨幣の権力と不可分に結びついて構築された家父長制であると主張したい。本論ではこの権力体制を「資本主義的家父長制」と仮称し、傲慢な父親がいかに貨幣の権力を用いるか、そしてまた、そのことがいかに彼自身の不安定な立場を露呈させるのかを見ていく。

2. 資本主義社会における貨幣像

a. 貨幣獲得の倫理的肯定

資本主義的家父長制を分析する上で、まずはなぜ貨幣が尊崇の対象となるのか、貨幣獲得がいかに正当化されるのかを確認する。マックス・ウェーバー（1864-1920）の論考『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904-05）を参照すると、ウェーバーは、プロテスタンティズムこそが資本主義の強力な推進力となり、その発展に寄与したのだと論じている。例として、ウェーバーはカルヴァン派の予定説に基づいた世界観を紹介している。予定説は、いわゆる TULIP 神学（T: total depravity, U: unconditional election, L: limited atonement, I: irresistible grace, P: persistence of the Saints）として理解されているものの一つである。まず予定説によれば、神によって救われるべき人間はあらかじめ定められており（unconditional election）、何人たりともこの決定を覆すことができない。しかし「聖徒の堅忍 persistence of the Saints」は同時に、敬虔な信徒であれば自らがその救われるべき人間であると信じ、現世における生活を耐え抜くことができるはずだと教えるのである。ウェーバーはこのような世界観を、「個人にとって前例のない内面的な孤独をもたらす」（Weber, 60）ものだと捉える一方、その反動として人々は神からの召命、すなわち世俗の職業を必死に果たそうとするのだと説明する。

いかなる場合においても、世俗的義務の遂行こそが神に喜ばれる唯一の道であって、許容されているあらゆる世俗的職業は神の目からすれば全く等しい価値を持つ（Weber, 41）。

となると、世俗的職業によって獲得された貨幣は、神の御心にかなう生き方をした証として、肯定的に受け止められることになる。貨幣はいわば宗教的倫理観の鏡であり、働けば働くほど、つ

まり貨幣を増やせば増やすほど、その人の道徳性も目に見えて増えていくのである。貨幣の増殖性というテーマは、アメリカの名士ベンジャミン・フランクリン（1706-1790）も言及しているところである。ウェーバーは、資本主義における理想像として、フランクリンが自己増殖的な貨幣像を提示したことに注目している。

貨幣は繁殖し、子を産むものだということを忘れてはならない（Remember, that money is of the prolific, generating nature）。貨幣は貨幣を産み、その子供もまた貨幣を産み、それが延々と続く（Money can beget money, and its offspring can beget more, and so on）。5 シリングが6 シリングになり、それがまた7 シリング3 ペンスになり、そのうちには100 ポンドになる。貨幣があればあるほど、その貨幣はまた多くの貨幣を生じさせ、利益も加速度的に上昇する（Franklin, 232）。

フランクリンは貨幣の自己増殖という資本主義的理想を説明するため、貨幣を擬人化し、それが「子を産む」ものだとして述べている。資本主義的理想の行き着く先として、貨幣というモノと、人間との境界が曖昧になる世界観が提示されるのである。では、この資本主義的感觉を踏まえて『ドンビー父子』を読むとき、何が見えてくるだろうか。

3. 『ドンビー父子』における資本主義的家父長制の構築

a. 父息子間の自己増殖的描写

『ドンビー父子』本編は、ドンビー氏の下に後継者となるべき息子が生まれ、氏が満悦する場面から始まる。この第一章冒頭部において、ディケンズはドンビー氏と彼の息子とに共通の身体的特徴を描写しており、両者がまるでクローンであるかのように印象づけようとする。

ドンビーは年齢およそ48歳であった。息子は生後およそ48分であった。ドンビーはやや禿げ上がり、やや赤ら顔である一方、顔立ちはよく体格もしっかりしていたが、あまりに厳めしく尊大であるため、良い印象は持たれなかった。息子は全くの禿げ頭で、ひどく赤ら顔であり、もちろん、申し分なく愛らしい子供ではあったものの、それでも全体としてはどこかしわくちゃで染みだらけという印象を与えた（Dickens, chap. 1, 5）。

この文章においてディケンズは、ドンビー氏の描写の後に息子の描写を反復させており、文体の上で両者の同質性を提示している。さらにこの後、息子はポールと名付けられるが、父であるドンビー氏と、その彼の父親も、同じくポールという名前であることが明かされる（第一章）。身体的特徴のみならず、名前においても、ドンビー氏と息子ポールとは緊密な関係で結ばれている。いわば両者の間には、母親の介在を想像させないような、父息子間の単性生殖的な関係が強調さ

れているのである。父親と瓜二つの息子の誕生を、単性生殖的な増殖のイメージで描くとき、フランクリンの述べたような、貨幣の自己増殖的イメージと重なる点が見えてくるのではないか。フランクリンは、貨幣という無機物に出産という有機的イメージをあてはめたが、本作のディケンズは、本来有機的であるべき誕生の場面を、無機的な再生産のイメージで描いたのである。

b. 貨幣としての父

この無機的な単性生殖というイメージを裏付けるため、ドンビー氏の容貌が貨幣のように描かれている場面に言及しておきたい。第二章において、「ドンビー氏は、髭もきっちり剃り、髪もきっちり剃り込んだ金持ちの紳士連の一員として、まるで新札のようにつやつやぱりぱりして、黄金のシャワーに浸かって人工的にぐっと引き締められたかのよう」(chap. 2, 20)だと説明されている。

この一節からは、次の二つの点が読み取れる。一点目に、ドンビー氏が「ぱりぱりの新札」や「黄金のシャワー」といった金銭的イメージで描かれており、彼の無機性が認識させられる。しかし、もし彼を「新札」になぞらえるのなら、第一章において「年齢およそ 48 歳」と説明されていたことは、どう考えればよいのであろうか。二点目の疑問は、ドンビー氏は使われない貨幣、すなわち流通しない貨幣ではないのかということである。この疑問と合わせて考えたいのが、ドンビー氏の商売に関する描写の欠如である。詳しく説明すると、本作を通して読んでみても、商人であるはずのドンビー氏が商取引や労働を行い、実際に貨幣を獲得する場面が一度も描かれていないのである¹。貨幣の出所がわからないばかりか、行われているはずの商売にも実態が見えない。つまり、ドンビー氏は人と人との関わりあう商売の世界から身を隠し、自己増殖的世界にとどまっているのではないかという疑いが出てくるのである。この疑問は、第二十章の次の一文からも裏付けられる。

ドンビー氏は長いこと自分自身の内側に閉じこもってきて、ドンビー父子商会の事業が行われている魔法の領域 (the enchanted circle) から、めったに足を踏み出したことがなかった (265)。

ドンビー氏の居座る商会こそまさに実態のわからぬ「魔法の領域」であり、彼は俗世間の生産法則が通用しない空間に、望んでとどまっていた、ということが読み取れる。その内側でこそ、生産をせずとも貨幣を生み出し、あるいは母を必要とせずとも、父から息子を生み出すという単性

¹ 本作の原題は '*Dealing with the Firm of Dombey and Son, Wholesale, Retail, and for Exportation*' であり、商会の業務として「卸売、小売、輸出」の三点が想定されている。このことを考えると、ドンビー氏はあくまで仲介人として、本人があくせく働かずとも、仕入れた品物に高値をつけて売っていれば、「何も産みださずに収入を得る」ことが可能だと考えられる。

生殖が可能になるのである。

c. 貨幣としての息子

資本主義的な自己増殖のモデルを父親たるドンビー氏にあてはめようとする以上、その息子ポールにも父同様、貨幣のメタファーが適用されてしかるべきである。本文第三章においては、ドンビー氏が息子ポールの様子を乳母に尋ねる場面があるが、彼らの対話には、本作における貨幣のメタファーをめぐる見逃せない部分がある。

「ポール坊ちゃまの調子はどうだ、リチャーズ？」

「それはもうすくすくと、元気にお育ちでございます (Quite thriving, sir, and well)」

「そのようだな」ドンビー氏は言った (chap. 3, 30)。

上に「すくすくと」と訳した単語 thriving をオックスフォード英語辞典にて調べてみると、この単語は大きく二通りの意味で解釈される可能性が出てくる。まず、2 番目の定義として載っている「すくすく育つ、元気である」という意味。乳母リチャーズとしては、まずこの意味で発話したものであろう。しかし thriving という単語には、他に「経済的に繁盛する」という意味も存在する。ドンビー氏を資本主義的な貨幣として措定する場合、この thriving という単語は、ただ生体の成長を意味するにとどまらず、貨幣の自己増殖が目指すところである経済的成長を意識させないではおかしい。文中ではもう一度 thriving という単語が出てくるが、ここでもこの語はやはり息子ポールの成長について言及するために用いられている。

しかし、先だっただけの見込みを裏切るかのように、付きっきりのお世話もむなしく、息子ポールが元気な子 (a thriving boy) に育つことはなかった (chap. 8, 87)。

跡取り息子ポールが、虚弱な少年としてやがて死を迎え、ドンビー父子商会もやがて破綻するという物語の流れを鑑みると、ポールの人生はそのまま商会の経済的生命を意味することとなる。ドンビー氏とその息子ポールとは、外見的特徴や名前の上でクローン的であるばかりか、金銭的なメタファーにおいても共通性を持つのである。

d. 女性の疎外

このように、父と息子とが経済的な絆で結ばれている一方、本作における女性は経済的価値を持たないものとして疎外される。例えば、ディケンズはこの家庭における娘フローレンスの立場をこう説明する。

しかし、ドンビー父子商会において娘が何だというのだろう！ 商会の名誉と威信という資産において、こんな子供など投資しようのない悪貨一枚（a base coin）—ほんの厄介者だ—物の数にも入らない（chap. 1, 7）。

ドンビー氏と息子ポールが金銭的メタファーで描写された一方、娘のフローレンスは「投資しようのない悪貨」として、金銭的紐帯から締め出されていることがわかる。さらに、阻害されるのは娘だけにとどまらない。ドンビー氏との間に息子ポールをもうけた妻のファニーもまた同様である。彼女は出産直後に生死の境をさまようが、そのこともドンビー氏にとっては「まるで自分の食器や家具の中から、何かを失くしたことに気づいたかのよう」（chap. 1, 9）だという程度の動揺しか与えない。死にゆく母親の姿は、ここでは金銭的価値の喪失として還元され、ドンビー氏と息子ポールとが経済的繁栄のイメージで描かれているのとは正反対である。第一章の最後がファニーの死で締めくくられることも考えると、ディケンズは本作冒頭において、金銭的紐帯を後ろ盾とする男性性と、金銭的価値を持たぬがゆえに排斥される女性性との対比を示したのだということに気づく。本作の資本主義的家父長制が示すのは、貨幣と人間との境界線があいまいになることで成立する、倒錯的ともいえる性の世界である。本来なら有性生殖に貢献しているはずの女性が、貨幣の再生産につながらない無用の財産だと見なされ、子を産めぬはずの男性が貨幣の再生産しながら、女性を介在させずに自己を複製していくのである。

4. 資本主義的家父長制の流動化

作品序盤においては、貨幣が家父長的権力と結びついた時、いかに男性性が自己の強化と再生産とを目指し、また女性性が抑圧されていくかが見て取れた。しかし、本作は貨幣の生み出す強固な権力体制と同時に、貨幣がそもそも不安定で流動的な存在であることも示唆している。このことからわかるのは、貨幣に依存する男性性というものの、不安定なものであるという事実である。

a. 氷塊としての貨幣

女性性が無価値で儚いものとして定義されるのであれば、資本主義的家父長制はその反対に、堅固で揺るぎない自己を強調し続けなければならない。自己の存続のみを目指して他者を顧みない金権主義者ドンビー氏の冷血ぶりを、ディケンズは氷のメタファーを用いて説明する。

自身の半生において、彼は一人として友人を持ったことがなかった。冷たくよそよそしい性格ゆえに、友人を探すこともなければ、出会うこともなかったのである。そして今、ここぞとばかりにその性格の総力をあげて、親となったことでの私利や野心といった身勝手な目論見に向かうとなれば、さながらそれは凍りついた流れ（icy current）のようで、間違っても

何かの拍子に溶け出したり、淀みなくさらさら流れることなどなく、雪解けするや否や、その流れの中に自らの重荷を取り込み、ついにはかちかちの氷の塊へと凝固してしまうのである (chap. 5, 48)。

引用文傍線部 ‘icy current’ という一節は、これまでの貨幣のメタファーとの関連性を想起させる。ここでの current という単語は、まず「水の流れ」として解釈されるであろうが、current には「流通する」という意味もあり、いきおい「通貨」を意味する単語 currency をも意識せずにはおかない。つまりこの文章では、自分の世界に閉じこもり、世間との交流を持たないドンビー氏の性格を「凍りついた流れ」、すなわち流通しない貨幣と重ね合わせていると言えるのではないか。

関連して思い出されるのが、「商社、会社」といった意味で使われている単語 firm である。本文中においては、「ドンビー父子商会」の代名詞として the Firm という単語が多用されるが、firm はもともと「固く、頑丈である」という意味を持つ。つまり「ドンビー父子商会」における貨幣とは、世間に流通することのない、凝固した貨幣なのであり、ドンビー氏はその貨幣の体現者として、息子以外の他人には冷たくふるまうのである。

b. 氷塊の溶融

このように盤石な氷塊として描かれた資本主義的家父長制であるが、その危うさが露呈するのは、ほかでもない息子ポールの発言がきっかけである。息子ポールは、ドンビー氏に対して「パパ！ お金ってなに？ “Papa! what's money?”」(chap. 8, 90) との質問を浴びせかけている。ここで注目すべきは、ディケンズがこの父子の会話を炉辺で行かせたということである。もし資本主義的家父長制を固い氷になぞらえるなら、炉辺の火は、凝固した権力体制を溶融する役割を持ちうるのではないか。そのことを示すのが、先ほどの息子の質問に対する、ドンビー氏の反応である。

ドンビー氏は困り果てた。できることなら、通貨、流通、価値下落、紙幣、金塊、為替相場、貴金属相場といった用語を用いて、息子に説明してもやれたろう。だが、小さな椅子を見下ろし、それが驚くほど下のほうにあったのを見て取ると、彼は答えた。「金と、銀と、銅だ。ギニー、シリング、半ペンスだ。何だかわかるな？」(chap. 8, 90)

この一節では、凍り付いたイメージで捉えられていた貨幣という概念が、息子ポールの発言によって、金銀銅といった様々な下位区分へと溶かされてゆくさまが見て取れる。ドンビー氏は金満家であればこそ、家父長的権力を発揮することができたのであるが、そもそも貨幣とは何かを考えると、様々な定義が存在する、あやふやな存在であることがわかる。これまでのドンビー

氏が貨幣の万能性を信じてきた一方、息子ポールの問いかけはここで、貨幣の不安定性というもう一つの重大な要素を提起するのである。貨幣は何にでもなれるし、何でもできる（“money, Paul, can do anything.” chap. 8, 90）が、そのことは同時に、いくらでも人間の恣意性を許してしまう、流動的であまい性質をも露呈してしまうのである。そしてこの不安定性は、息子ポール自身の死によっても裏打ちされる。病床に伏せる彼は、部屋に差し込む夕日が「黄金のさざ波 golden water」（chap. 16, 207）として目に映り、「河がさっさと流れてゆく ‘How fast the river runs’」（chap. 16, 211）のを見ながら息を引き取る。死の場面にことごとく水のイメージが用いられ、強固な権力を構築すべき貨幣としての息子ポールを、押し流してしまうのである。

息子ポールの死によって、資本主義的家父長制のモデルはその土台を失うこととなり、物語に大きな影響を及ぼす。第一に、男性のみで達成されるべき単性生殖的モデルが実現不可能になり、ドンビー氏の拠り所である貨幣への明白な不信感が生まれる。第二に、貨幣の価値が疑問視されるということは、女性を排斥する根拠も失われるということにもなる。貨幣への不信感はそのまま、家父長制そのものの不安へとつながり、ドンビー氏に再考を強いるのである。

c. 女性の購入による男性性の再強化

息子ポールの死によって損なわれた家父長的権力を、ドンビー氏はいかにして埋め合わせようとするのであろうか。物語中盤における彼の再婚騒動は、その損失を補填するためのものとして考えられる。息子ポールの死後、ドンビー氏はいったん家を離れるが、旅先で出会った寡婦イーディスと知り合い、彼女を再婚相手として見定める。しかし、イーディス自身が指摘するように、これは決して愛情の結果などではなく、むしろ金持ちであるドンビー氏が、自らの家父長的権力を確認するための戦略である。イーディスは自分の母親に対し、次のように説明する。

「あの人にとって私は競売の物品なのよ。買うだけの価値があるとお考えなのね。好きにしたらいいわ！ あの人が私を見に来た時—きつと値踏みしに来たのでしょうけど—私の嗜み事の目録を見たがったわ。だからくれてやりました。私の手並みを一度でも見せてやれば、俺は買い物上手だろうって、取り巻き連中に証明できるのだわ。私は先方にご所望を尋ねて、お望み通り披露しました。それ以上は御免だわ。あの人は自分の思い通りに買い物をするの、値打ちがあると思ったら、金の力にものを言わせてね」（chap. 27, 366）

資本主義的家父長制において、貨幣は人間関係を性産業化し、男性を購入者、女性を商品として規定する。しかしドンビー氏は、ただイーディスを商品として購入するのではない。イーディスという商品の価値を他の男性に見せつけることで、彼は自らの資本主義的家父長権を見せつけることができるのである。男性が大枚をはたいて女性を獲得することは、結局ほかの男性と差をつけ、自分をより高く見せることに他ならない。ドンビー氏は、いかにもイーディスを妻として見

定めることによって、揺らぎ始めた権力を再び強固に構築しようとするのである。

d. 溶け出す氷の鎧

ただし、ドンビー氏があくまで貨幣に固執する以上、貨幣そのものの不安定さから逃れることはできない。挙式を迎えたドンビー氏とイーデイスであったが、彼の高圧的な態度はイーデイスの反感を煽るだけであった。物語が進むにつれ互いの不満は募り、最後にはイーデイスの駆け落ちによって両者の関係は決定的な破局を迎える。このことによって、ドンビー氏は大きな恥をかかされることとなる。つまり、女性という商品を購入することで男性性を強固にしようという目論見は、かえって資本主義的家父長制の自壊的性質を露呈してしまうのである。ここでディケンズは再び、ドンビー氏の冷たい態度がいかに他者を遠ざけ、また自身をも傷つけてしまうかを強調する。

ドンビー氏のような性根の男はそもそも、自分のそのような気質に反対の声を上げることもないし、尊大でとげとげしい気質を和らげようとしもないものである。また、ドンビー氏が身を包む冷たく固い傲慢の鎧 (the cold hard armour of pride) は、不遜な侮蔑や反抗と絶え間なくぶつかり合ったところで、決して撓もうとはしないのである (chap. 40, 518)。

この一節でも序盤の「氷の流れ」と同様、ドンビー氏の気質が冷たく凝り固まった氷のイメージで描かれている。特に、ここでは「冷たく固い傲慢の鎧」とあるので、先に溶融してしまった貨幣という概念を、ドンビー氏がふたたび硬化させたものとして見ることができる。だが、ディケンズは続けて、このような氷の鎧を身にまとったがゆえに背負う苦しみがあるのだと付け加える。

このような鎧を身にまとう者はまた、重い報いをも受けることになる。この鎧の前には、慰撫や愛や信頼は通用しない。他人からもたらされる、親切な同情の全てが無駄だし、あらゆる信用や、優しさや、柔らかな感情をも跳ね返す。だがしかし、自己愛をぐさりと刺された (deep stabs in the self-love) 時、その脆いことと言ったら、さながら裸の胸を突き通されるようなものである。そしてこのような傷は拷問のような苦しみのうちに化膿し、じくじくと疼く。どんな傷だろうが、これに匹敵するものはない。たとえ、傲慢そのもので固めた手甲でもって、弱弱しい自尊心が無防備に打ち据えられようと、この痛手には及ばない (chap. 40, 519)。

この氷の鎧の弱点こそ「自己愛」であり、イーデイスが我が意に従わないのを見て、ドンビー氏は自己愛に深手を負っているのである。ここでディケンズは、「ぐさりと刺された」傷が化膿するという生々しい負傷のイメージを用いているが、ドンビー氏にとってここまで後を引く痛みと

は、何であろうか。氷と貨幣のイメージを再び思い返してみると、ドンビー氏の傷口から血が流れ出すかのように、貨幣が流出してしまったのではないかという可能性が出てくる。その証拠に、本編四十章冒頭部においてこの傷の描写がなされたあと、ドンビー氏はイーディスが社交のために費やした金銭について言及するのである。

「お前は高くつきすぎる (You are too expensive, Madam)」とドンビー氏は言った。「金がいくらあっても足りない奴だ。よくもまあこれだけの大金を浪費してくれた (You are extravagant. You waste a great deal of money) ——紳士の懐具合を考えればまず、大金と言って差し支えない額だ——それも私には何の必要もない、社交などのためにな。全く、何から何まで不愉快だ」(chap. 40, 522)

ドンビー氏の手元に収まっているべき貨幣が、イーディスによって意図せざる方向へと流出してしまい、彼の心には激しい不快感が生じている。息子ポールとの炉辺の会話においても、ドンビー氏は貨幣の万能性を示そうとして、逆にその不安定で流動的な性質を説明させられてしまった。今回もドンビー氏は、イーディスとの再婚によって貨幣の権力を示すどころか、かえってその貨幣をイーディスに消費させられてしまうのだ。ディケンズは、男性性の強化が企図されるほど、それがかえって財産の流出を招き、男性性の不安を掻き立てるのだということを繰り返し描いている。そしてこの流出のモチーフは、物語のクライマックスとともに加速してゆく。

資本主義的家父長制の下で、女性が男性の財産として扱われることはすでに述べたが、物語後半においては、「ドンビー父子商会」破綻の前段階として、イーディスとフローレンスが相次いでドンビー氏の下を去る場面が描かれている。イーディスはドンビー氏との口論の末、ついにドンビー氏の部下と駆け落ちする(四十七章)。これに激昂したドンビー氏は、泣きながらすがりつくフローレンスを打擲し、続けてフローレンスも家を飛び出すこととなる(四十七章)。家父長的な強権を振るえば振るうほどに、彼は自身を不利な状況へと追い込んでしまう。とうとう自身の商会までが破綻し、彼の家具は競売にかけられ持ち去られることとなる(五十九章)。注目すべきは、このような財産の流出と同期して、ドンビー氏自身の生命力も衰弱していく点である。とうとう白髪頭となった彼は、生死の境をさまようこととなるが、フローレンスの献身的な看護の甲斐あって、結局は一命をとりとめる。仮死状態を経て、娘との和解を果たしたドンビー氏は心機一転し、愛する家族に囲まれた好々爺として社会復帰を果たす。

彼は二度と、野心的な事業に心惑わされることはなかった。ただ娘と娘婿だけが、彼の誇りであった。彼は物静かで、思慮深く、控えめな物腰で、いつでも娘と一緒にいた(chap. 62, 803)。

ドンビー氏はもはや、貨幣に基づいた自尊感情に立脚せず、フローレンスという娘を持ったことに誇りを抱いている。象徴的なのは、最終章において、フローレンスの産んだ子供たちと海辺を歩くドンビー氏が、涙を流す場面である。これまでも、堅固な家父長制の象徴として描かれてきた氷のイメージは、決まって溶かされたり流動化したりするものとして描かれてきた。ここでのドンビー氏の涙は、まさしく雪解けであろう。ディケンズは彼の涙を通して、冷たい資本主義的家父長制の世界観からの完全な脱却を印象づけている。貨幣が性を管理することは、もはやない。貨幣の喪失によって、有性生殖的な人間世界が再び日の目を見ることとなるのである。

5. おわりに

妻や娘を犠牲にしても貨幣を増殖させようとする冒頭部のドンビー氏と、莫大な財産を失っても娘との家庭があれば満足げな結末部のドンビー氏との姿は、あまりにも遠い。物語の結末として、後者のような生活態度を世に問うたディケンズの狙いとは何だったのだろうか。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』でウェーバーの指摘したような貨幣獲得の正当化は、いわばそれだけ貨幣獲得競争が苛烈であり、またなりふり構わぬものであったことを示唆するものと言える。例えば、ジョン・スチュアート・ミル (1806-1873) は、ヴィクトリア朝の英国人を席卷した「徹底した不安定感 (entire unfixedness)」が存在したことを述べている。

例を挙げると、個々人の社会的立場に対する、徹底した不安定感がある。誰も彼もが、この流れに続いている。今の自分の立場に絶えざる不満を抱き、次なる高い立場へ自分を押し上げたいという、激しい欲求である (Mill, 144)。

ミルの指摘したような上昇志向に必要なものとは何であったか。当時の通念において、その代表と言えるのが貨幣であった。ハーバート・スペンサー (1820-1903) は、貨幣獲得がヴィクトリア朝人の尊敬を集める要素、すなわちリスペクタビリティの獲得に等しかったことを指摘している²。もし金持ちがジェントルマンだというのなら、これはまぎれもない貨幣の擬人化である。まさしく、貨幣獲得は男性にとって、人間性を危うくするものでもあった³。ジョン・ラスキン (1819-1900) は、彼の講演録『胡麻と百合』(1865)において、世間における労働を家庭の安楽と区別し、外の世界において男性が心を荒ませてしまうことに言及している。

男性は、広い世間における荒仕事の中で、あらゆる危険や試練と鉢合せるものである。つま

² Spencer, 144.

³ Carlyle, 281.

カーライル (1795-1881) に言わせれば、商業的世界はすでに「異郷 a world alien であって、あなたの世界ではない。」そこには「父も、子も、兄弟もない」という。

り彼はどうしても、失敗や罪、逃れようのない過ちに直面せざるを得ない。彼はしばしば傷つき、膝を屈しなければならない。間違った方向に流されてしまうことも珍しくない。結果として、彼はどうしても頑になるのだ (*always hardened*) (Ruskin, 101)。

この「頑になる (*hardened*)」という感覚は、「ドンビー父子商会 (*the Firm*)」の堅固な体制と重なる部分があろう。しかし頑なに自己の利益のみを追求するだけでは、ドンビー氏のように自壊を待つほかない。貨幣獲得はいわば、それが利己心に由来する場合、批判の対象とされたのである。ディケンズがドンビー氏に探求させたのは、家族の利益になる貨幣ではなく、ただ自己の家父長的権力を増大させるだけの貨幣である。リスペクタビリティの美名でメッキされた資本主義的欲望に対し、ディケンズは、貨幣によって手に入る地位も決して盤石のものではありえないことを突きつける。貨幣への欲求は、尊敬すべき家庭像を産みだすどころか、安楽なるべき家庭に殺伐とした権力関係を持ち込み、ついに家庭を崩壊させてしまうのである。ディケンズは、貨幣がジェントルマンを作るという通念に反して、むしろ貨幣への執着を捨てることにこそ、本当のリスペクタビリティを見出そうとしているのである。ドンビー氏は、貨幣獲得競争の王座から転落し、家庭の中のただの老人となることで、かえって熾烈な競争社会に見切りをつけることができた。家庭と社会とが全くの別世界であるとすれば、家庭には社会的地位を無効化する効果がある⁴。世間的なあらゆる肩書きを押し流してしまう家庭こそ、無慈悲な外界に対するシェルターでもあり、男性の丸裸の人間性を審査しうる機関でもある。そこで我々は、社会的に成功を収めた者のみがジェントルマンと呼ばれた一方、なぜ家庭におけるジェントルマン像が顧みられなかったのかに気づくのである。

参考文献

- Carlyle, Thomas. *Past and Present*, with an introduction by G.K. Chesterton. -- Oxford University Press, 1965, 1965. — (Riverside editions ; B92).
- Dickens, Charles, 2002. *Dombey and Son*, introduction and notes by Karl Smith. Wordsworth Editions Limited.
- Franklin, Benjamin, 1950. 'Advice to a Young Tradesman,' from *The Autobiography of Benjamin Franklin and Selections from his other Writings*: with an intro. by Henry Steele Commager New York, Random House.
- Houghton, Walter. W., 1957. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. Yale University Press.
- Mill, John Stuart, 1874. 'Democracy in America,' in *Dissertations and Discussions*, II. New York: Henry Holt and Company.
- O'Gorman, Francis (ed.), 2007. *Victorian Literature and Finance*. Oxford : Oxford University Press.
- Ruskin, John, 1889. *Sesame and Lilies: Three Lectures*, New York : J. Wiley.
- Shrimpton, Nicholas, 2007. "Even these metallic problems have their melodramatic side": Money in Victorian Literature", in O'Gorman (ed.), pp. 17-38.
- Spencer, Herbert, 1996. "The Morals of Trade," in *Essays: Scientific, Political, and Speculative vol.3*. London, Routledge, Thoemmes Press.

⁴ Houghton, 345.

Weber, Max, 2001. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. London, Routledge.
松村昌家他, 1991.『ヴィクトリア朝小説における父と子』